

ハイデガーにおける哲学と科学 — 『哲学入門』を手がかりにして—

池 辺 寧

1. はじめに

ハイデガーは1928/9年冬学期に、『哲学入門 (Einleitung in die Philosophie)』と題した講義を行っている。「入門」と題する以上、通常は当該学問に関する予備知識をもたない初学者を対象にした講義が行われる。「哲学入門」であれば、初学者に向けて、哲学史を概観するとともに、哲学の諸主題を体系的に取り上げた講義が行われることになる。ハイデガーも講義の冒頭でひとまずこのことを認め、「哲学入門は歴史的な側面に加え、体系的な側面ももたなければならず、これら二つの側面が相補うことで、きわめて優れたものになる」(GA27, 2)と述べている。歴史的で体系的な「通例の哲学入門」は入門者を哲学の領域の外に立っている者とみなし、哲学の領域のなかへと導き入れることを講義の課題と捉えている。だが、ハイデガーは、このような捉え方を出発点において根本的な錯覚に基づいていると退ける。というのも、「われわれはたとえ哲学についてはっきりとは何も知らなくても、哲学はわれわれのなかにあり、われわれはつねにすでに哲学しているという意味で、哲学はわれわれ自身に属しているがゆえに、われわれは哲学のなかにいる」(GA27, 3)からである。

ハイデガーによれば、哲学することはときおり携わるような人間の態度のことではない。「人間であることは哲学することをすでに意味している」(GA27, 3)。ただ、多くの場合、「哲学はわれわれのうちでいわば眠っている」(GA27, 4)。それゆえ、哲学入門と題した講義の課題も、哲学の領域のなかへと導き入れるのではなく、われわれを覚醒させ、哲学を始めるように導くこと (Einleiten) にある。哲学を始めるにあたっては、自己を見つめることが不可

避である。もっとも、自己を見つめるといっても、心理学的な自己観察とは異なる。また、自己を起点にして、人間関係のあり方を考えることでもない。哲学は自己を見つめることを通じて、人間の本質を認識しようとしているのである。

ハイデガーが言う「哲学すること」とは一言で言えば、存在の思索である。存在の思索とは、人間の存在や人間のさまざまな行為を成り立たせ、社会や歴史、科学（学問）を存立させる基盤を問う営みである。ハイデガーは哲学することを人間の根源的な行為とみなす。一方、科学的研究も人間の態度の一つであるゆえ、人間という存在者の存在様式を備えている。しかし、科学的研究は人間の唯一の存在様式でもなければ、人間が取りうる態度のなかで最も身近な存在様式でもない（SZ 11）。すべての人が科学的研究に取り組んでいるわけではないし、研究者のなかには他のすべてを犠牲にして研究に没頭した生活を送っている人もいるであろうが、研究を研究者にとっての最も日常的な生活の仕方と一般化することはむろんできない。

ハイデガーは『存在と時間』で人間の態度として科学について言及しているが、その際、併せてこう述べている。「この存在者を、われわれは術語的に現存在と言いつつ」（SZ 11）。彼はここで、科学に関わる存在者という観点から、人間を現存在と定義している。この定義は、現存在の存在の解明が科学の基礎づけにつながることを示唆している。ハイデガーは『存在と時間』（1927年）などの著作においても、1928/9年冬学期講義『哲学入門』など、『存在と時間』刊行前後の講義録においても、科学を哲学的・存在論的に基礎づけようと試みている。本稿では『哲学入門』を主な手がかりとしながら、ハイデガーの科学論（学問論）や、哲学と科学の関係について論じていきたい。

2. 科学の危機

科学が主題としているあらゆる対象の根底にある事象領域に関する規定を、ハイデガーは根本概念と呼ぶ。歴史、自然、生命、等々といった事象領域は、それらに対応する歴史学、物理学、生物学、等々の科学的研究の対象として主

題化される。歴史などの事象領域は科学的研究に先立って根本概念のうちで了解されているが、この了解があらゆる科学的研究を導いている (SZ 9f.)。もっとも、個々の科学は自らの根本概念を前提しているが、根本概念そのものは主題化されることはない。「自然、つまり、時空間的な運動全体についての科学は、時間そのものを対象としないし、空間そのものや運動そのものも対象としない。対象とするのは空間的・時間的に運動されたものである。根本概念の了解は非主題的である」(GA80.1, 196)。1927年の講演「現象学と神学」において、ハイデガーはこのように明言している。

自然についての科学である物理学は時間、空間、運動、力などの概念を通俗的な概念に依拠して理解し、それらの概念を駆使して研究を行っている。しかし、運動の本質、時間の本質、等々を改めて問うこともなく、「物理学者は時間を考慮しつつ運動を計測するという仕方で、時間を使用している」(GA25, 33f.)。同様に、たとえば歴史学や生物学は歴史とは何か、生命とは何かといったことを改めて問うことなく、歴史的な出来事や生命現象を取り扱っている。改めて問うことをしないのは、科学的研究が遂行されるにあたって、事象領域は「科学以前の経験と解釈」によって、「素朴で大まかに」、すでに確定されているからである (SZ 9)。ハイデガーは『ニーチェ』(1961年)において、いかなる科学もそれぞれ固有の科学的手段によっては自分自身について何も述べることができないと断言している。彼によれば、数学とは何か、文献学とは何か、生物学とは何かという問いは、数学的、文献学的、生物学的には何も解明することはできない。彼はさらにこう語る。「科学とは何かという問いはたしかに、問いとしてはもはやいかなる科学的な問いでもない。科学一般への問い、それは常に同時にある特定の考えられうる科学への問いであるが、そのような問いが立てられる瞬間、問う者は新しい領域に踏み込んでいる。この領域は、科学においては周知のもののみなされているのとは異なる証明要求と証明形式をもっている」(GA6.1, 332)。ハイデガーはこのように語り、新しい領域として「哲学の領域」を挙げる。

ちなみに、ここで引用した『ニーチェ』の一節のもとになったのは 1937 年

夏学期の講義録であり、この講義録においてもほぼ同様のことが記されている。ただ、講義録では、哲学の領域が「まったく新しい領域」(GA44, 118)と特徴づけられている。哲学は科学とは異なる領域であるとはいえ、「あらゆる科学は哲学に根をもっており、哲学からはじめて生じる」(GA27, 17)。そうである以上、「まったく新しい」という形容だと両者のあいだに断絶があるかのような誤解を生みかねない。そこで彼は『ニーチェ』を刊行する際に「まったく (völlig)」という語を削除し、哲学を「新しい領域」と言い表したのであろう。

ところで、『存在と時間』が刊行された 1920 年代は、19 世紀末から 20 世紀初頭にかけての「科学の危機」と言われた時代の渦中にある。数学においては、数学の対象となるべきものにいかにも迫っていくかをめぐって形式主義と直観主義のあいだで論争が行われ、「基礎の危機 (Grundlagenkrisis)」に陥っていた。物理学においては、相対性理論が登場したことにより、物理学に予め与えられている事象領域の構造への問い、つまり、物質の問題に直面することになった。ハイデガーはこのほかに生物学、精神科学、神学における危機についても言及している (SZ 9f., GA20, 4ff.)。

科学に危機が生じているのは、個々の科学と、それらが問いかけている事象との根本的な関係が疑わしいものになったからであり、個々の科学の伝統的な根本概念が不確かなものになったからである。それゆえ、危機と向き合い、根本概念の不確かさを取り除いたり、根本概念を変革したりすることが必要になってくる。根本概念が変革することによって、科学は発展する。このことは、1927 年の講義や講演でハイデガーが繰り返し指摘していることである。彼は次のように語っている。「ある科学の本来的な発展や歴史は、新事実が発見されることによってではなく、その科学の根本概念が変革することによって、すなわち、当該の領域の存在体制の了解が変化することによって遂行される」(GA25, 34)。「根本概念の諸規定はある領域の存在体制の企投のうちで獲得されるが、この規定は決して最終的なものではなく、変わりうるものである。それどころか、根本概念の変更において、ある科学の最も内的で決定的な

展開がまさに遂行される」(GA80.1, 197)。

科学が危機に陥り、根本概念の変革が求められるとき、科学とは何かと問わざるを得なくなり、哲学に踏み込む必要が生じる。もとより、ハイデガーに従えば、あらゆる科学は潜在的には哲学であるが、危機においては、科学は哲学になる。しかも、「このことは、科学はそれ自身では行うことができない根源的な解釈を必要とすることを意味している」(GA20, 4)。「根源的な解釈」を行うのは哲学である。本稿の目的は科学に対する哲学の役割をハイデガーに即して考えることである。このことを考えるため、『哲学入門』にみられる科学の危機に対する言及に触れておきたい。

ハイデガーは同書で、科学の三つの危機を挙げている。三つの危機とは、「1. 科学そのものの内的本質構造における危機、2. われわれの歴史的・社会的現存在の全体における科学の位置に関する科学の危機、3. 科学そのものと個人の関係における危機」(GA27, 27)のことである。彼は三番目の危機から逆順に論じているので、本稿でもそれに従い、「科学そのものと個人の関係における危機」から逆順に取り上げていくことにする。

ハイデガーによれば、科学とは、大学の雰囲気と呼ぶことができるものを規定している力の一つである。科学は力である以上、科学の概念に第一義的に属しているのは研究することであって、専門的・技術的に教えられ学ばれるような知の集積ではない。「科学は問うことの情熱、発見することの感激、批判的な報告の厳格さ、証明や根拠づけの厳格さのうちのみ実存する」(GA27, 13)。ハイデガーは科学をこのように、現存在が有する力の一つと捉えている。ところが、科学の専門化・細分化が進むにつれ、大学における科学的研究の営みに柔軟性が失われている。そのことにより、個々の研究者にとっての「科学の実存的位置」(GA27, 28)が不確かなものになっている。つまり、個々の研究者は科学にいかに関わるべきか、科学的研究はその研究者にとっていかなる意味があるのか、といった問いが問われることなく、曖昧なままになっている。ハイデガーはこの点に「科学そのものと個人の関係における危機」を見出す。そして、この危機を「科学の実存論的本質の問題」(GA27, 29)とみな

す。彼は次のように言う。「三番目に挙げた危機がわれわれに喚起することは、科学の本質は明らかに人間的な現存在そのものの連関のなかで、その根本体制にもとづいて把握されなければならないこと、したがって、このような方向において得られるのではない科学のあらゆる定義は本質的に役に立たないことである」(GA27, 30)。ハイデガーは科学を「実存の仕方」と捉え、それを「科学の実存論的概念」と名づけたが(SZ 357)、この箇所にもそのような捉え方が反映されており、彼の科学観がよく表れている。なお、「科学の実存論的概念」については後の節で改めて取り上げることにする。

二番目に挙げられた危機は「われわれの歴史的—社会的現存在の全体における科学の位置に関する科学の危機」であるが、これは科学の実践的性格に関する危機である。われわれは一般に科学を、真理の探究をめざす知的な営みと理解している。科学はたしかに、あらゆる効用を度外視して真理を探究する、といった純粹に理論的な性格を有している。しかし、何のために真理の探究を行うのかと言えば、真理のための真理の探究にとどまらず、社会や日常生活への還元もやはり期待されている。科学は理論的性格を有すると同時に、実践的性格ももつ。しかも、科学はその成果を社会や日常生活に応用することによって初めて実践的になるのではない。むしろ、「科学はそれ自体において実践的であり、科学の真理がどこに存するかが把握されさえすれば、それ自身で直接に影響を及ぼす」(GA27, 33)。ハイデガーはこのように考えているが、科学の実践的性格、換言すれば、「文化全体における科学の位置」(GA27, 33, 34)が危機にあるというのである。

ハイデガーは、個々の科学の実践的性格はさまざまであり、容易には規定できないと断ったうえで、医学を例に挙げ、医学の実践的性格の危機について次のように指摘する。「たしかに医学の諸成果には異論の余地はない。しかし、医学的諸認識の全体の内部で医師の実存形態のような実存形態が直接に生じうる地平のなかに、すべての医学的な認識が置かれているのかどうか、という問題が生じている。若い人たちは医学的知識をもっているが、医師とは何であるかを決して身をもってわかっていないこと、医学的な知識と医師としての実存

とは内的に連関していること、したがって、この関係が明らかにされないかぎり、もしそう言ってよければ、医学のうちにはどこか腐敗したところがあること、こういった注目すべき事実が存在する」(GA27, 34)。

通常、危機に陥っている科学の例として言及されるのは、上で列挙したように数学や物理学などである。医学が挙げられることはない。医学は唐突に語られたにすぎず、ハイデガーはこのとき具体的にどのような事態を念頭に置いていたのか、医学も根本概念がゆらいでいるため危機が生じていると考えていたのか、そのあたりのことは定かではない。ハイデガーは科学の実践的性格の一例として医学に言及しただけであって、医学のあり方を主題にしているわけではない。医学への言及は講義のなかに盛り込まれた挿話といえなくもない。だが、医学的な知識と医師としての実存との関係が明らかにされないかぎり、医学にはどこか腐敗したところがあるという、彼の指摘は今日の医学のあり方を考えるうえで示唆に富む。次節で科学の発生を論じる際に、医学の問題を改めて取り上げることにしたい。

ハイデガーは『哲学入門』では科学の危機を、ある時代にみられる事態ではなく、科学が存在するようになって以来、すべての科学のなかに存する事態と捉えている (GA27, 35)。ハイデガーはこのような危機を科学の危機の一番目に挙げ、「科学そのものの内的本質構造における危機」と言い表している。彼が科学の危機をこのように捉えるのは、研究者は個々の科学を当の科学の手段によっては根拠へともたらずすることができないからである (GA27, 38)。われわれは先に参照した『ニーチェ』と同じ趣旨のことを、ハイデガーが『哲学入門』においてすでに語っていたことを見出すことができる。彼は『ニーチェ』と同じ例を挙げ、こう述べている。「数学は数学的には把握することができない。また、いかなる文献学者も文献学の本質を文献学の方法でもっては解明できないであろう」(GA27, 38)。科学は「人間の实存の一つの本質的な可能性」(GA27, 41) である。数学と何か、文献学とは何かを問おうとすれば、人間の实存における科学の役割や可能性などを解明しなければならない。これらが未解明のままであるかぎり、いつの時代にあっても科学は危機にある。

3. 科学の存在論的発生と医学における問題点

科学的研究は人間が人間以外の存在者と関わる態度の一つであるが、最も身近な態度ということではできない。最も身近な態度は存在者を何らかの道具として利用ないしは使用することである。ハイデガーは存在者に対するこうした関わり方を、科学以前の態度と捉え、人間がさしあたってまず第一に取りうる態度とみなしている。そのうえで彼は、科学以前の態度から科学的態度への転換を特徴づけているものについて問うていく。科学以前の態度であれば、ある存在者を道具連関のなかに位置づけ、何らかの道具として利用ないしは使用していたが、科学的態度においては、存在者の道具的性格や所在している場所はもはや問題とされなくなる。そのことによって、科学以前の態度が有する、何かのために利用・使用するという目的志向が解除され、存在者は自由な仕方を受け取られるようになる。このような科学的態度をハイデガーは「対象化」と名づけ、その点に科学の発生を見出す。対象化とはあるものを対象とすることであるが、対象化によって研究の領域として境界づけられた事象が研究の主題となる（GA25, 26ff.）。

ここでは 1927/8 年冬学期講義を参照してまとめたが、主題化については『存在と時間』においても、次のように述べられている。「手許にある道具が有する環境世界的に枠づけされた所在の場所の多様性が、純然たる位置の多様性に変様するだけでなく、環境世界の存在者が総じてその枠づけを解除される。眼前存在者の一切が主題になる」（SZ 362）。「そのつどすでに何らかの仕方に出会っている存在者を科学的に企投することは、その存在者の存在様式を明示的に了解させることである。しかも、そのことでもって、世界内部的な存在者を純然と発見するための方途にどのようなものがあるのかも明らかになってくる。このような企投の全体には、存在了解を分節化すること、存在了解に導かれて事象領域を限界づけること、当の存在者に適合した概念的構成を素描することが属している。われわれはこうした企投の全体を主題化と名づける。主題化がめざしているのは、世界内部的に出会っている存在者を、それが純然たる発見〈に対して投げかけてくる〉ことができるように、言い換えれば、客

観となることができるように明け渡すことである。主題化は客観化する」(SZ 363)。

少し長く引用したのは、医学における主題化の問題と対比させたいからであるが、その問題に立ち入る前に対象化・主題化について引き続き言及しておきたい。

ハイデガーは『哲学入門』では対象化や主題化に相当する態度を、「物質的な事物を単に眺めること」と言い表している。彼はこのような態度への転換を「存在者に対する根本的な態度のまったくの転換」と特徴づける(GA27, 182)。「単に眺めること」への転換は何もしないことではなく、事物がそれ自身において現れることへと態度を切り替えることである。これは事物に対する積極的な関わり方の一つである。つまり、事物の性質や状態などを明らかにしたり、その事物がもつ可能性を探ったりすることによって、事物が自らをあらわにする機会をつくりだすことである。ハイデガーはこうした行為を「原行為(Urhandlung)」(GA27, 183)と呼ぶ。原行為とは、「存在者を存在させること」に対してハイデガーが名づけた術語である。なお、事物のもとにとどまり、事物を単に眺めることは、環境世界的に枠づけされた日常生活のなかでの態度とは異なり、存在者を自由な仕方を受け取ることによって可能になるため、「余分な時間(Muße, 余暇)」(GA27, 183)を必要とする行為である。

ハイデガーが科学について語る時、第一に念頭に置いているのは数学的物理学である。彼が問うているのは、物理的自然の全体を対象としている近代の自然科学はいかにして成立したかである。事実の観察や実験、計算は古代においても行われており、近代の自然科学の成立にとって決定的な要因とはいえない。ハイデガーは決定的な要因をガリレイの自然認識のなかに見出す。ハイデガーによれば、ガリレイは観察や実験を行う際、自然を、空間的・時間的な拡がりのなかに存している動きのある物体の連関として把握していたという。さまざまな物体が存在するにしても、自然はその空間的性格、時間的性格のいずれにおいても量的・数学的に規定されているという意味で、物体の多様性は同質である(GA27, 187)。ガリレイのこのような自然認識により、自然が数

学的に企投されることが可能になった。自然の数学的企投のうちで、自然は対象化され、自然の認識は科学的な認識として成立する。ハイデガーは自然の数学的企投をガリレイやケプラーの業績として評価し、次のように述べている。「ガリレイやケプラーの業績の決定的な点、重要な点は、事実の観察や実験ではない。そうではなく、純然たる事実というものはまったく存在せず、自然の領域そのものが境界づけられるときにはじめて、事実が事実として捉えられ、実験へと組み入れられる、という洞察である」(GA25, 32)。

われわれが自然を対象化するとき、「使用事物とは区別されて、突然、物理的自然と呼ばれる物質的事物の普遍的な領域が現れる」(GA27, 189)。物質的事物が現れるのは、あるものを使用事物として把握することから自然として把握することへと移行したからであるが、このことが可能なのは存在了解が変化したからである(GA27, 195)。存在了解とは、われわれが存在者と関わる時、いたるところで先行的に働いているものである。ハイデガーが挙げている些細な例をここでも挙げれば、存在了解をしていなければ、われわれは取っ手を握り、ドアを開けることすらできない(GA27, 192)。ある科学が科学として成立するためには、「その科学が主題とする存在者の本質体制を先行的に限界づけること」(GA27, 188)が必要であるが、その際、不可欠なのが存在了解の変化である。というのも、先行的な存在了解が差し出す光によって、存在者は科学的な研究の対象として照らし出され、研究の主題となるからである。このことをハイデガーは「存在体制の先行的な企投」(GA27, 195)と呼ぶ。対象化されるのは存在者であり、存在体制が対象となることはないゆえ、存在体制の先行的な企投は非対象的な企投である。また、この企投でもって、研究対象となる存在者の領域が画定されるため、「存在体制の先行的で非対象的な企投は領域画定をする企投である」(GA27, 196)。

上で予告した医学における主題化の問題に立ち入ることにしたい。ハイデガーは、他者の分析は環境世界における諸事物の分析とは異なり、本質的にかなり難しいと考え、「意図的に」言及することを差し控えている(GA21, 235)¹⁾。彼が対象化や主題化という語でもって指しているのは、物質的事物

であって、人間ではない。彼が考えているのはあくまで「使用事物の把握から自然の把握への移行」(GA27, 195)という存在了解の変化である。それゆえ、ハイデガーは上記の議論において、人間を対象とする医学については何ら考慮していないであろう。そのことを承知したうえで医学の問題に立ち入りたいのは、前節で引用したようにハイデガーも科学の危機について語った際に医学に言及しているからである。

身体を物体化することにより、身体を対象化・主題化することが可能になる。ハイデガーは『ニーチェ』やその草稿である1936/7年冬学期講義において、人間の身体を単なる物体とみなす誤解を自然科学の問題点として指摘している(GA6.1, 100, GA43, 118)。身体を物体視することは誤解であるにしても、ハイデガーが言うように誤解のうえに自然科学が成立しているのであれば、対象化・主題化をめぐる彼の議論は医学のあり方を考えるうえでも参考になる。言うまでもなく、この誤解が特に問題になるのは医学においてである。以下、医学のあり方を考えていくことにするが、その際の手引きとしてトゥームズの『病いの意味』を参照したい。『病いの意味』は、多発性硬化症という難病にかかっている著者が自らの体験を踏まえて患者の視点に立って、病いの体験や、医師と患者の関係について現象学的に論じた本であり、大変示唆に富む(本書は翻訳書の副題や版元から、看護を主題にした本のように受け取ってしまいがちだが、原題の副題を見ると明らかなように医師-患者関係を主題にした本である)。

トゥームズによれば、医師が診ている患者の身体は「科学的対象としての身体」、つまり、神経生理学的な有機体である。臨床の場面で医師が理解している身体は、究極的には純粋に物質的な用語で説明可能なものである。したがって、「(科学的対象としての)物理的身体は世界内存在であるよりは、純粋に機械論的性質の観点において受け取られており、そのことによって、もはや<状況のうちには>存在しない」²⁾。医学的な視線は患者の身体の内側に向けられ、病理解剖学に基づく理論構成によって身体を解釈する。「医師はさまざまな機器の助け(聴診器、検眼鏡など)を借りて、また、医師自身の五感(たとえば

腹部のしこりを触診する指、目障りな発疹を視診する眼、心雑音を聴診する耳)を用いて、身体の表面から内側へと注意を向けていく。こうした過程は、体の奥深いところにある器官や組織を顕在的に視覚化する機械(X線やCTスキャンなど)を使うことでさらに推し進められるだろう³⁾。トゥームズは医師の診察をこのように記述している。

ハイデガーは存在者の科学的企投を主題化と捉えている。主題化において、環境世界的な枠づけが解除され、存在者は純然と発見されるようになる。ハイデガーの言う主題化はあくまで事物に対して語ったものであるが、トゥームズの記述に従えば、医師の診察においても当てはまるだろう。患者の身体は状況のうちにある世界内存在ではなくなり、純粋に機械論的性質の観点において受け取られるようになる。医師は問診や触診、視診、聴診、さらに検査値や画像などを手がかりにして診断を下すが、その際、医師は客観的に数量化できるデータの観点から患者の病気を主題化する。しかも、多発性硬化症、糖尿病、消化性潰瘍といった特定の症例として主題化する⁴⁾。ハイデガーは主題化について「存在者の存在様式を明示的に了解させる」と述べていたが、診察においても患者は多発性硬化症、糖尿病などの患者として明示的に了解されることになる。

上で引用したように、「主題化は客観化する」(SZ 363)とハイデガーは言う。彼は科学の発生を記述するなかで「客観化する」という過程を指摘しただけであり、客観化そのものを批判しているわけではない。だが、医学にあっては「主題化は客観化する」こと自体がすでに弊害をはらんでいるといえる。トゥームズに依拠して、弊害としてさしあたり次の三点を指摘したい。第一に、医師の診察を受けるにあたって、患者も自らの病気を主題化する。患者は日常生活に及ぼす影響という観点から病気を捉え、不安や疎外感などを抱いて病気を主題化しているのであり、医師とは主題化の観点が異なる。ところが、医師は、病気に対する主題化の相違が医師と患者の見解の相違を生んでいることに気づいていない⁵⁾。第二に、患者はそれぞれ独自の身体を生きる主体であるが、治療介入が生物学的な身体の機能障害にのみ集中し、生きられた身体の

不調に注意を払うことがなければ、患者は自らが物理的な身体として、非人間的に扱われたように感じる。医師が客観的な数量的臨床データだけを見て、不調という患者の主観的な経験を侮っていると、患者は自らの人間性を失ったように感じる⁶⁾。第三に、患者は自らの病気が主題化されることにより、自分自身によっても自らを病んでいる主体ではなく検査の対象（客体）とみなすようになる。自己が主体から客体へと転換されるとき、患者は何が起ころうとも自分では効果的にコントロールできないと感じ、医師に依存せざるを得なくなる⁷⁾。

以上、本稿ではトゥームズに依拠しながら、医学、とりわけ医師－患者関係の問題点を挙げた。これが、ハイデガーが考える「腐敗したところ」をどこまで言い当てているかは不明であるが、ハイデガーが科学の発生を対象化・主題化に見出している点を敷衍すれば、以上のような指摘も可能であろう。この指摘は、医学が科学に立脚している以上、医学が必然的に抱えざるを得ない危機といってもよいかと思われる。もっとも、ハイデガーの関心は医学でなく、科学と人間はどのように関わっているのかにある。次節ではこのことに立ち入ることにはしたい。

4. 科学の実存論的概念

ハイデガーは科学の一般的な定義として、「真なる諸命題の基礎づけ連関の全体」(SZ 11) という定義を挙げる。この定義はフッサールに由来するが、科学をその成果の観点から理解したものである。ハイデガーはこの定義を「科学の論理的概念」と名づけているが (SZ 357)、「今日、科学論と認識論において一般に行われている科学の定義」(GA27, 48) である。しかし、「この定義は完全ではなく、科学の意味を言い当てていない」(SZ 11) とハイデガーは退ける。というのも、人間の根本体制にもとづいて把握されていない科学の定義は本質的に役に立たないからである。科学を定義するために問わなければならないのは、人間は科学とどのように関わっているのかである。ハイデガー自身の言葉で言えば、「現存在が科学的研究に従事するという仕方を実存でき

ることを可能にする、現存在の存在体制のうちに存している実存論的に必然的な条件とはどのようなものであろうか」(SZ 357)、である。このように問うとき、ハイデガーが念頭に置いているのは、科学を実存の仕方として捉える「科学の実存論的概念」である。

ハイデガーは『存在と時間』第 69 節 b の冒頭の段落において、「実存論的概念は科学を実存の仕方として、したがって、存在者を発見したり存在を開示したりする世界内存在の様態として了解する」(SZ 357) と述べている。このあと第 69 節 b で取り上げられていることは主に科学の存在論的発生についてであるが、最後のところで、真理内存在が現存在の実存規定をなしていること、存在者を主題化するためには現存在は主題化された存在者を超越していなければならないこと、これらのことが簡単に触れられている (SZ 363)。本節では、これらのことを『哲学入門』に即して敷衍し、実存の仕方としての科学について考えていきたい。

一般に科学の目的は真理の探究とみなされている。ハイデガーもこのことを否定しないであろうが、問題は真理とは何かである。科学を「真なる諸命題の基礎づけ連関」と捉える一般的な定義においても、科学は一種の真理と捉えられている。この定義によれば、科学とは、「真理がある真なる命題と同義であるかぎりでの諸真理の連関」(GA27, 156) である。この定義は「知性と物の一致」という伝統的な真理概念に遡ることができるが、ハイデガーは伝統的な真理概念を「真理の根源的な本質に触れていない」(GA27, 50) と退ける。そのうえで彼自身は真理のありかを現存在のうちに求め、「発見する (entdecken)」という語で言い表す。「現存在は狭義の〈発見〉をしようがしまいが、その本質上、発見しつつある〔覆いを一取り除きつつある entdeckend〕。現存在は常にすでに、発見されている眼前存在者と出会う。(略) 眼前存在者の真理は発見されてあることである」(GA27, 121)。ハイデガーは真理の本質を存在者の不伏蔵態 (Unverborgenheit) に見出し、さらに不伏蔵態を現存在の実存に属するものとする。彼によれば、現存在はまずもって真理、つまり、不伏蔵態の内に存在しているからこそ、個々の状況において

は、偽り、誤り、思い違いなどの非真理の現象が生じるのである。

科学は真理の一種であり、真理は不伏蔵態として、現存在の実存に属している。ハイデガーはこう考えることで、科学もまた現存在の実存に属しているとみなす。しかも、科学は付随的・追加的に現存在と関わっているのではない。「科学は一種の真理として、現存在の本質規定である。つまり、科学は真理内存在の特殊なあり方にほかならない」(GA27, 157)。もちろん、こう言ったからといって、ハイデガーは、すべての現存在は科学に従事しなければならないとか、科学的な真理は科学以前の真理より優れていると考えているわけではない。科学は、科学以前の現存在によって根拠を与えられる、現存在の自由な可能性の一つである。現存在は科学以前にすでに真理の内 で存在している (GA27, 159)。ただ今日、科学的な物の見方はわれわれのあいだで広く浸透しているし、われわれの多くは科学の恩恵を受けた生活を享受している。それゆえ、ハイデガーは次のように言う。「われわれ、つまり、今日の事実的な現存在は科学的な現存在である。われわれは科学的であることを現存在から抹消することはもはやできない」(GA27, 161)。

すでに述べたように、ハイデガーは人間の実存における科学の役割や可能性が未解明のままであるかぎり、科学は危機にあると考えている。科学の危機が問題であるのは、今日の現存在は科学的な現存在であるからである。科学以前の態度をとっているときであっても、今日の現存在は科学的な物の見方による制約を受けており、科学的な現存在である。そこでハイデガーは「科学の実存論的概念」という語を提示し、科学のあり方を問う。彼は、科学が科学でありうるために「科学の実存論的概念」を仕上げることの必要性を説くが、その際、「何か別なもの、よりいっそう根源的なもの」として挙げているのが哲学である (GA27, 157)。

ハイデガーは『哲学入門』において、哲学することを超越することという語で特徴づけている。以下、超越について言及することにした。対象化・主題化という理論的な態度を可能にしているのは、存在の先行的な企投である。ハイデガーはこの企投を、現存在の原行為とみなしている。原行為とは存在者を

存在させることであるが、存在させることは存在者に対するあらゆる態度のうちに存している。それゆえ、存在の先行的な企投は、現存在が存在者と関わるにあたっての前提であるが、それは科学を形成する際にはじめて必要となる前提ではなく、現存在が実存するかぎり、いつでも、また、いたるところで働いている前提である。ハイデガーは「存在の先行的な企投において、われわれは前もって常にすでに存在者を超越している」と考え、「存在者を先行的に超越すること」を超越と名づける（GA27, 206）。研究に従事し、存在者の真理を探究しようとする「あらゆる情熱」も、存在の先行的な企投に支えられているが、企投自体は現存在の根本体制としての超越に基づく（GA27, 212）。ここで言う超越とは、ある主観がある客観に向かって自己を超え出していくのではなく、われわれはすでに外に、つまり、世界の内に実存していることを指している。存在者を先行的に超越していることによって、存在者は存在者としてあらわになり、われわれは存在者と関わるができるようになる。

「超越することのうちには存在了解が生起している」（GA27, 213）とハイデガーは言う。だからこそ、われわれは存在者と関わるができるのである。彼はさらに次のように述べる。「超越が人間的現存在一般の根本本質をなしているならば、明確に超越することのうちで生起しているのは、本質的に超越している現存在が超越を明確に生起させることにおいて本質的になるということにほかならない」（GA27, 213）。ここでの焦点は、超越を明確に生起させることにおいて現存在が本質的になることである。このことは「存在そのものへと明確に問うこと」であり、とりもなおさず、「哲学すること」である。つまり、超越することは哲学することである。これは次のことを意味する。「哲学することとして明確に超越することは存在者の存在へと繰り返し問うことである。存在を存在として問い尋ねることは、存在を概念的に把握することを求めることである」（GA27, 216）。

ハイデガーは、「明確に超越することは現存在の自由の原行為である」（GA27, 214）とも言う。原行為とは存在者を存在させることであり、ハイデガーは科学の発生について述べた際にも原行為に言及していた。科学が存在者を対象化・主題化するとき、存在者は眼前に置かれたもの（positum）として

あらわになっており、そのことによって、われわれは存在者をそれ自身において認識できる。科学的認識とは置かれたものとしての存在者を認識すること、つまり、実証的な (positiv) 認識である (GA27, 197)。科学とは存在者についての学問、すなわち、実証的な学問である (GA9, 48)。科学は実証的という性格を有するが、ハイデガーは実証的性格の内的可能性を「実証性」と呼ぶ (GA27, 197)。科学の実証性を可能にするのは存在者を存在させること、つまり、現存在の原行為にほかならないが、上で引用したように、現存在の原行為は超越することである。しかも、超越することは哲学することである。したがって、現存在の原行為とは哲学することを指しているといえる。ハイデガーは哲学することを、「存在了解をその内的な可能性において形成し、その根拠へともたらし、了解を形成し、企投としての了解や企投を明確に遂行すること」(GA27, 217) と説明しているが、存在者を存在させるためにはこれらのことは欠かせない。

科学をはじめて可能にするのが哲学であり、哲学はそのことによって、考えられるあらゆる科学よりもいっそう科学的である (GA27, 221f.)。一方、科学は哲学的であるかぎりにおいてのみ科学的である。後者は『ニーチェ』でハイデガーが述べていることだが、彼はさらに次のように言う。「科学が哲学的であるとは、科学が自覚的に (wissentlich)、そして疑問を抱いて、存在者そのものの全体へと立ち返り、存在者の真理を問うことを意味する」(GA6.1, 333)。科学とは存在者の認識であり、認識される存在者の領域は画定されており、存在者全体に関わることはない。科学はあくまで個別科学であって、一般科学といったものは存在しない (GA27, 224)。存在者全体を問うのは哲学である。したがって、科学が存在者全体へと立ち返り、存在者の真理を問おうとするならば、哲学的にならざるを得ない。

「原理的にはある人の科学的な業績は、常に他の人によって代替可能である」(GA27, 225f.) とハイデガーは言う。同じような研究を他の人が別個に行うことは可能であるし、他の人と研究の引き継ぎを行うことも可能である。また、ある人の業績に帰せられる発見や発明などを、他の人が行った可能性も十

分にある。しかし、哲学においてはそうはいかない。哲学するのはこの私であり、他の誰にも替わってもらえない。哲学においては、「誰もが自己自身において全体的であり、一回的である」(GA27, 226)。科学が哲学的になるといっても、科学的研究に従事する者が研究のかたわらで、研究に加えて哲学するのではない。われわれは誰であっても実存しているかぎり、それぞれが置かれている立場や状況のなかで代替不可能な仕方哲学している。ただ、それは明確でなく、たいていの場合非本来的であるにすぎない(GA27, 226f.)。

今日のように、科学が高度に専門化・細分化した時代にあってもなお、哲学は科学を基礎づけると主張し続けることに対しては、時代錯誤という批判もある。批判者から見れば、哲学は科学の発展に追いつくことができず、もはや万学の女王ではなく、「万学のシロウト」⁸⁾でしかない。こうした批判に対して、ハイデガーであれば、「あらゆる科学は潜在的・根本的には哲学である」(GA25, 38)という主張でもって反論するであろう。先の批判では、哲学と科学を二つの別個の学問とみなす見方が前提されているが、ハイデガーはこの前提を受け入れない。彼にしてみれば、科学の根底には哲学があるからこそ、科学は哲学的になることで自らを基礎づけることができるのであり、哲学はあらゆる科学よりもいっそう科学的である。こうしたことを踏まえると、ハイデガーが科学を実存の仕方として「科学の実存論的概念」を説いているとき、そこで彼が考えているのは、研究者各自が自らの専門分野に即して哲学することに自覚的になることといえる。

註

ハイデガーの著作からの引用・参照頁は次の略号を用い、本文中に記した。なお、訳出にあたっては、ハイデッガー全集(創文社)など、既存の翻訳書を適宜参照した。

SZ *Sein und Zeit*, 15.Aufl., Max Niemeyer 1979.

GA *Gesamtausgabe*, Vittorio Klostermann 1975ff. (巻数、頁数の順で記

す)

- 1) 拙論「ハイデガーの共同存在論」、『奈良県立医科大学医学部看護学科紀要』第4号、2008年、36-37頁参照。
- 2) Toombs, S. K., *The Meaning of Illness: A Phenomenological Account of the Different Perspectives of Physician and Patient*, Kluwer 1992, p.78. (永見勇訳『病いの意味—看護と患者理解のための現象学』、日本看護協会出版会、2001年、152頁)
- 3) Toombs, *The Meaning of Illness*, p.78f. (邦訳、152頁)
- 4) Cf. Toombs, *The Meaning of Illness*, p. 11f. (邦訳、43頁以下参照)
- 5) Cf. Toombs, *The Meaning of Illness*, p. 11ff. (邦訳、44頁以下参照)
- 6) Cf. Toombs, *The Meaning of Illness*, p. 86. (邦訳、163頁参照)
- 7) Cf. Toombs, *The Meaning of Illness*, p. 94. (邦訳、185頁参照)
- 8) 浜野喬士『エコ・テロリズム』洋泉社、2009年、215頁。

付記)

本研究は JSPS 科研費 15K02012 の助成を受けたものである。

(奈良県立医科大学准教授・哲学)